

「子母澤寛文学賞」【佳作】

「水芭蕉」 北海道 近藤ゆみ子

土手の斜面には、いじけたような草が斑に生えていた。

薫さんの薄い肩に手を添えて登りきると、舗装された遊歩道になっていた。視界が開け、風が私のピアスをくすぐる。たったそれだけの事なのに、石狩の、石狩らしい風に出会った気がした。息を吸い込み、感覚の扇を更に広げてみる。

四月の下旬にしては、外気が冷たい。私は伯母の薫さんと、約束していた。

春になったら、一緒に水芭蕉を見に行こうと。

それがどんな花なのかも知らずに、私は運転手役を買ってでた。そして今日、父の車で、国道二三号線を辿ってきたのだった。父は「安全運転」の一言と一緒に、キーを貸してくれた。

土手の上から眺めた先は平地が百メートルほど続き、寒々しい雑木林になっている。

遠くの木立から、犬を連れた人影が手品のように現れた。

「ほら、あそこに道ができているのよ。あの世の入口」

薫さんは指さして、ちょっと得意げだ。

七十五の歳のせい、時々言動がおかしくなる。認知症のせいなのか、個性が行き過ぎた表現なのかは分からない。

「今度は下りだから、転ばないように気をつけてくださいね」

蟹のような横這いで、手を繋いで土手を下りる。こんな場所で、骨折でもされたらことだ。その日から、寝たきりになり兼ねない。ちゃんと足元に注意して欲しいのに、薫さんは私を探るように見ている。

「ありがとう。雪ちゃんは、いつもあたしに優しい」

そう言える人の方が、余程優しいです。

俯いたまま、下りるのに一生懸命な振りをした。

「雪ちゃん、あとで厚田漁港の朝市まで足を伸ばして、買い物しましゅうね。水揚げされたばかりの、蛸が名物なのよ」

「ええ。美味しそう」

私は、蛸が嫌い。ミッチリ並んだ吸盤を見ると、鳥肌立つ。しかし、薫さんに言われると、厚田の蛸は特別かもしれないと思うから、不思議。

よちよちと無事に土手を下り、しばらく歩くと、看板が立っていた。

『マクンベツ湿原』とある。

木立の入口は酷いぬかるみだが、人の手による木道が真っ直ぐ伸びてい

た。

「この先が、あの世なんですね。木道が敷かれていなかったら、長靴が必要でしたね」

「騙されないで。擬木だから」

「ギボク？」

よく見ると、杭も板張りも樹脂のようだ。

「この道は、並んで歩くと足を踏み外しそうになるから気をつけて。でも一人だと、何となく脇が寂しく思えるのよ。ちょっと、人生に似ていない？」

私は、二十八歳で離婚を経験し、薫さんは一度も結婚したことがなかった。

「以前に、誰かと水芭蕉を見に来たことがあるんですか？」

「十年以上前の話よ。すっかり呆けてしまった父を、連れてきた事があったわ。善雄ちゃんが、車椅子を押してくれたのよ」

善雄とは私の父である。

祖父の一寸橋長治（ひとつばし・ながはる）は、八十四歳で亡くなるまでの数年を、札幌市内の老人ホームで過ごした。隣の石狩市にほど近い、アルツハイマー型認知症を受け入れてくれる施設だった。

姉弟で親の面会に行き、わざわざ外に連れ出していたのだとは、意外だった。父は商売にかまけて、家族のことはあまり意に介さない人である。薫さんも、身内の中では影が薄く、祖父の七回忌法要にも現れなかった。だけどやはり、二人きりの姉と弟だったのだ。

ハンノキ林はまだ一枚の葉もつけておらず、不毛な様相を晒している。根元には枯れた葦が折り重なり、青黒い水面が広がっていた。なんとも、陰鬱な光景だ。薫さんがあの世なんて言うから、餓鬼でも幹の陰に隠れていそうだ。

少し歩くと、ポツリポツリと、白い炎のような植物が咲いている。

「へえ、これが水芭蕉の花なんですか」

「あなた、三十になって初めて知ったの？ 歌にもあるでしょう」
薫さんが、わざと呆れたように目を見開くので、思わず苦笑した。

「雪ちゃんの笑顔、善雄ちゃんにそっくり。めんこいよ」

それ、褒め言葉になっていませんよ。

白髪を、象牙の簪と揃いの薄い櫛だけで巻き上げ、自分で仕立てたグスターコートを着ている薫さん。透き通るような肌で、生活の垢を感じさせない。俗っぽい父や私と、同じ血が流れているとは思えなかった。年齢の割に凛と伸びたうなじを見ていると、ちょっと痛々しい。

木道を鳴らす、私達の足音だけが響く。

まばらだった水芭蕉が、群落に変わった。

青みがかった葉は、水中から天に向かって開き、成長したもので六、七十センチはあった。黄色い穂を包んでいる純白の葉は、巨大な花びらのようだ。

「水芭蕉はね、強い。残雪と薄氷の下から芽吹く姿はいじらしくて、土壌に咲く軟な花とは違うのよ。不思議ね、同じ花なのに、冷たい水に浸かるのを良しとするなんて。まだ若い時は、さやかで可憐な姿だけど、ごらん、ここまで伸びて成熟するとふてぶてしいというか、凄みがあるわね」

手の届きそうな水芭蕉を見つめ、喉の奥で笑った。

「亡くなる少し前の父はね、殆ど話すことも無く、私や善雄ちゃんの顔も分からなくなっていたの。それがここに来て『水芭蕉だなあ、薫』って言ったのよ。娘にあまり関心の無かった人だけど、私、その一言で何もかも帳消しにすることにしたの」

さっきまでの風は鳴りを潜め、水面は微動だにしない。

木道はどこまで続くのだろう。

水芭蕉が私達を、湿地の懐に導いた。

一年半前、横浜から札幌の実家に出戻った。

別れた夫は会社員だったが、彼の両親は、お洒落な雑貨と家具の店を営んでいた。私は骨身を惜しまず、家業を手伝った。同居した舅姑との軋轢が離婚の主な原因ではあったが、後になって考えると、家業への私の出過ぎた情熱が、災いしたのだと思う。幸か不幸か、子供はできなかった。

気が弱く優しい夫は、愚痴を辛抱強く聞いてくれた。決して私を批判するようなことは、なかった。同時に、両親を諫めたり、仲介に入ってくれることもなかった。結束の固い親子三人にとって、私は出しゃばりな新参者のままで終わってしまった。

大きな寿司屋の娘だから、それなりに商売っ気のある嫁だろう、と期待していたに違いない。私は私で、それに忘えたい、早く仕事を覚えて自分の居場所を作りたい、と必死だった。

猛暑の日、スーパーで食材を買った帰り道、回転寿司店に吸い込まれるようにして入った。

心身ともに疲労し、とにかく寿司を欲していた。ボイルされて乾き始めた海老を食べた時、北海道に帰ることを決心した。

私の父、一ツ橋善雄は『はじめ寿司』の三代目だ。札幌の繁華街、すすきの交差点に九階建ての自社ビルを構えていた。一階から三階まで、立ちと、つけ場を構え、上階は宴会場や、そのまま二次会に利用できるようなテナント店も数軒入っている。すすきの観光の顔のような存在で、回転寿司とは一線を画した老舗だが、外国人観光客も多く、気取りのないマンモス寿司店である。

父は相撲取り並みの体格で、太い指の平たい爪は誰よりも清潔だった。子供の頃の私は、大きな手に顔をこすりつけて、酢飯の甘い香りを確かめるのが好きだった。

離婚した当初、母はよく泣き、父は口をきいてくれなかった。鬱々とした娘を不欄に思ったのか、諦めたのか、少しずつ折り合いがついていった。季節が一巡した十二月の朝、いきなり父が私の部屋のドアを開けた。

「雪子、お前はこれからどうする気だ」

何事が起きたかと、ベッドの上に正座した。

お父さんは、私に将来の展望でも語らせたいのだろうか。

「どうするって……。歯でも磨いて、バイトに行くわよ」

「薫さんの様子がおかしい。お前、一ツ橋の家まで行って、ちょっと見てこい」

この家が一ツ橋の本家であり、兄の春樹家族も同じ敷地内に居を構えていた。父が言う『一ツ橋の家』とは、曾祖父の正司が戦前に建てた家のことだった。父とは腹違いの姉の薫さんが、ひっそりと住んでいた。

『薫さん』という他人行儀な言い方は、複雑な血縁を浮き彫りにしていたが、どこか崇高な伯母にふさわしい呼び名でもあった。

「バイトを休んで行ってあげてもいいけど、どうおかしいのよ」

「なんだ、その恩着せがましい言い方は。たまには親の役に立て。呆けだよ、呆け。用事があってこっちから電話をしたのに、俺のことを誰かと勘違いしているようだ。何度かけ直しても、電話に出やしない」

たったそれしきの事で……。

ため息を押し殺して、ベッド脇の段ボール箱からカーディガンを手にとって羽織った。

私の部屋は、実家を出ていた間に納戸替わりにされ、横浜から持ち帰った荷物も加わって、足の踏み場にも窮する。かと言って整理する気力もなく、物に埋もれた倉庫番みたいな生活が続いていた。

父は短い首をさらに縮め、ベッドの端で言い訳がましく付け加えた。

「お前の爺さんも、そうだった。婆さんは先に逝っていないし、認知症の爺さんを常に見張っているわけにはいかないから、施設に入れたんだ。

俺も母さんも、春樹も嫁さんも、みんなで丸くなって働いたから、北海道の冷え切った景気の中で、こうして店を潰さずに済んでいるんだ。お前は知らないだろう。爺さんが徘徊して大変な時、都会に憧れて好きにやっていたんだから」

東京の女子大に進学する時『家業に囚われず、自由に生きてみる』なんて鷹揚な父親を演じたのは、お父さんではないか。私は春樹お兄ちゃんが、生まれた時から『はじめ寿司』の四代目であるのが羨ましかった。女子大を出てから、遅ればせながら一念発起し、飲食店で働きつつ調理師の資格を取った。いつか自分の店をもちたいという、夢があった。しかし現実の壁は厚く、その後結婚離婚と道を大きく逸れてしまったのだから、何も言えない。

目を伏せている私に、父はぼそぼそと続けた。

「俺はこれから、広告代理店の人間と会う。外国人向けの、ウェブ広告の契約があるんだ。インターネットのことはよく分からんから、春樹も連れて行く。薫さんのこと、頼んだぞ」

私だけ、随分地味な役回りだなあ、と思った。

粉雪が、ショルダーバッグに小さな水滴を作った。

地下鉄と路面電車を乗り継いで、伯母の住む古い一軒家にやってきた。何年も来ない間に、辺りの家並みは変わっていた。新しいマンションの谷間で、一ツ橋の家は時の流れから落ちこぼれていた。

都心では今時珍しい板張りの外壁で、石の門柱と板塀に、葉の落ちた蔦が毛細血管状に絡んでいる。入口の両開きドアの上には、嵌め殺しの色ガラスが施されていた。『はじめ寿司』の初代大将の正司が暮らしていた当時は、洋風の豪邸だったに違いない。

二代目にあたる祖父、長治は十八歳の時に『はじめ寿司』に住み込みで働いていた年上の女性、ヒデ子と駆け落ち騒動を起こした。

鯨景気に湧いていた厚田の漁場で二人は見つかり、連れ戻されたが、生まれたばかりの赤ん坊も一緒だった。ヒデ子は、まだ歩けない赤ん坊を置いて行方をくらましたという。それが薫さんなのだ。

薫さんが数えて十一の時、長治は見合い結婚をし、跡取り息子を儲けた。父の善雄だ。

義理の母に遠慮のある薫さんを、曾祖父は早々に、遠い大阪の洋裁学校に上げた。良かったのか悪かったのか、薫さんは手に職を持ち、一人で生きるようになった。

姉弟には、世間一般にはない、距離と緊張感が存在する。ケンカしたり、おやつを分け合って大きくなった春樹お兄ちゃんと私とは違って、ちょっと気の毒な二人なのだ。

父は自分から、決してそんな話をする事はなかった。

これらは、他家から嫁いできた母が、教えてくれたことだった。善意を装って、わざわざ若い嫁の耳に入れる従業員もいたのだ。

『ヒデ子は、店の金を持ち逃げしていなくなった』とか、『一代目の正司大将が、手切れ金を渡したに違いない』とも言われ、『ヒデ子は厚田村に戻ったのだ。長治坊ちゃんは利用されたのだ。もしかすると、赤ん坊は網元の落とし子ではないべか』などと言う輩もいたらしい。

母は、長治お祖父ちゃんが、妻として迎えたお祖母ちゃんから辛く当たられることが多く、苦々しい思いを娘の私に吐露することで乗り切ってきた。

『お祖母ちゃんは、意地悪だから。なきぬ仲の薫さんは、気配を消すような生活をしていたんでしょね』と、同志のような情を寄せていた。そしてまた、何が事実か分からない、お家事情の話に戻るのだった。

長治お祖父ちゃんと父は、もっと店に近く、広い土地に家を建てた。住む人がいなくなった一ツ橋の家に、薫さんが見計らったようにして、大阪から帰ってきたのである。

私は、板塀の看板の文字を声に出して呟いた。

「オートクチュールカヲル お直しも承ります」

こんな錆びの浮いた文字を当てにして、今の時代、誰が訪ねてくるというのだろう。

よく見ると、板塀が撓んで多く波打っている。庭木は雪囲いもせず、重みで折れた枝もあった。

あちこち直さなくてはいけない家は、維持費もかかるだろう。

息が白く長い尾を引いた時、丁番が軋んで扉が開いた。

薫さんが、奇妙な生き物を見るようにして、筋張った首根でショールを搔き合わせていた。

刺すように言われた。

「あなた、ずっと立っていたでしょう。一体何の御用ですか」

「お久しぶりです。雪子です」

「雪子？ そんな人知りません。警察を呼びますよ」

閉まりかけた扉に、慌てて追いつがった。

「善雄の娘です。薫さんの、弟の、ヨシオ」

不信感いっぱい黒日が、小刻みに揺れた。

「あら、善雄ちゃんの？ まあ、雪ちゃんだったの。いやだわ、それならそう言ってくれないと」

だから、言ったじゃないの……。

コロコロ笑う薫さんにようやく認められ、軽いショックを引きずりながら、ブーツの雪を落とし、玄関のたたきに足を踏み入れた。

天井が高く、埃と樟腦のにおいがする。廊下の無垢材は、昔と変わらず黒い艶を放っていた。子供の頃は家の貫禄に気圧され、お化け屋敷みただと思っていた。いま見ると、郷愁をそそる造りである。

薫さんは、玄関マットに正座して私を見上げた。

「雪ちゃん、あっちに嫁いでから綺麗になったわね。ご主人も一緒にお越しなの？」

コートのフードを下ろそうとした手が、一瞬止まった。薫さんは、父からまだ何も聞いていないのだ。生木を裂くような離婚ではなかった。なのに『失敗』という文字が、おでこに貼られている気がする。辛うじて笑顔を作り、黙って首を横に振った。

薫さんはちょっと間をおいてから、何度も小刻みに頷いた。

下駄箱に手をかけて立ち上がり、茶の間へ向かいながら「寒いから早く上がって。コーヒーと紅茶、どっちがいいかしら」と、歌うように言った。

スリッパはひんやりとして、褪せてはいたたがゴブラン織りだ。同じ冷たくても、ビニールのそれとは違った。私は振り返って、嵌め殺し窓の色ガラスを見上げた。内側から見ると明り採りの緑や青、黒混じりの赤が光を透過して美しい。

私が歩くと、廊下の床材がキュウキュウと鳴いた。

薫さんが歩いても、鳴らなかったのに……。

どこか芝居がかったその家に、酔い始めていた。

「だってね、第一声が『ああ、いたの？ 俺だけど、俺』よ」

一緒に炬燵で温まりながら、ティーバッグをカップに泳がせた。

「雪ちゃんのお父さんも『善雄だけど』とかなんとか、名前くらい言えばいいのにね。私、特殊詐欺に違いないと思って『まあ、その声は小太郎なの？ 元気にしていた？』って、引っ掛かった振りをしただけなのよ。それを認知症と間違えられたら、心外だわ」

「お父さん、心配してましたよ。かけ直しても電話に出ないって」

「それはそうよ。こっちは、高齢の一人暮らしよ。警戒するじゃない」

「でも、小太郎って誰なんです？」

「昔、店で飼っていた雑種の犬よ。善雄ちゃんはまだ四、五歳くらいだ

ったけど、覚えているはずよ。よく一緒に、じゃれ合っていたから。善雄ちゃんこそ、物忘れが激しいんじゃない？」

薫さんは、飢えを満たすかのように、よく笑い、よくしゃべった。

父は本当に名乗らなかったのだろうか。薫さんは、こんなに毛玉の出たセーターを着るようなタイプだったのだろうか。炬燵の上も飲みかけのグラスや、キャップの無い軟膏、開封されていない郵便物などで雑然としている。紅茶の準備を手伝おうとした時、台所のゴミ箱が溢れているのが気になった。燃やせないゴミの日を待っているのか、底が真っ黒に焦げた片手鍋が転がっていた。

茶の間の隣は、十二畳の仕事部屋である。

ガラス戸の向こうにカバーのかかったミシンと作業台、仮縫い用の首のないボディーが見えた。壁の一面は収納の引き出しになっている。余計なものは一切無かった。立ち上がって覗いていると、薫さんは自嘲した。

「既製服に押されるわ、年はとるわで、ずっと仕事をしていないのよ。それはそうと雪ちゃん、あなた、ご主人と何かあったの？」

石油ストーブに乗ったヤカンのシュンシュンという音を間に挟みながら、離婚に至ったこと、実家に居づらいが、出る気力もない事を、途切れ途切れに打ち明けた。

「もしよかったら、ここで私と一緒に住まない？」

突然の提案に驚いた。

「私ね、善雄ちゃんから、もっと住みやすい高齢者向け住宅に移らないかって言われているのよ。元々、土地も家も善雄ちゃんの物だけど、ここを壊したり、売却するつもりなら嫌だわ」

耳を疑った。

「ここは、薫さんが相続したのだと思っていました」

「私と弟は腹違いなだけではなく、戸籍上も父親が違うのよ。私が生まれた時、父はまだ十八歳だったから、私は正司の娘ということになっているのよ」

「曾お祖父ちゃんの……」

「一代目の正司が亡くなった時、まだ洋裁学校に通っている歳だったし、二代目の父が亡くなった時は、戸籍上は妹ですもの、善雄ちゃんが一つ橋の家をそっくり相続したの」

「それじゃあ、薫さんばかり貧乏くじを引いているようじゃないですか」

「札幌ではちょっと知られた『はじめ寿司』で、一つ橋なんて偉そうな名前がついているけれど、生まれつき何の権利も権限も用意されていないの。洋裁学校を出してもらったから、食べてこられたけれど、いまは年金

生活ですもの。いきなりここを出て行けと言われても、私、困るわ」

もし一緒に暮らすことになれば、当分は現状維持できると目論んでいるのだろうか？

だとすると、私は人質みたいなものだ。

どこの家も、大きな声では言えない事情を多少なりとも抱えている。しかし、薫さんにまつわる話は尽きない。帰ってから、母に教えるのも憚られた。

薫さんは、小首を傾げて思案顔を試みさせた。

計算の上の仕草かもしれないと、注視するが、憂いをたたえた横顔は、ただ美しかった。

父とようやく話ができたのは、二日後の午後だった。忘年会シーズンだったこともあり、実家ではすれ違いが多かった。

私は、店まで行くことにした。どこの飲食店も人手不足で悲鳴を上げているのに、縁もゆかりもないステーキハウスをアルバイト先に決めた私である。古顔の板前さんやレジさんと顔を合わせるのには、気が進まなかったが、そうも言ってはいられない。

ランチタイムが終了した中休みに、二階のボックス席で待っていた。父は、かけ蕎麦の入ったどんぶりを手に現れた。

「冗談じゃない。俺は店を継いだと同時に、このビルの借金も背負ったんだ。あの家の、固定資産税を出しているのも俺だ。薫さんは家賃もかからず、修繕費の請求書も俺に転送してくるんだぞ。やっぱり呆けているんじゃないのか。被害妄想もいいところだよ」

父は、勢いよく蕎麦をすすりあげた。

「いいじゃないの、わざわざ高齢者住宅なんて嫌味なこと言わなくても。最期は一つ橋の家の畳の上で往生したいんでしょ。好きにさせてあげれば？」

「雪かき一つ考えても、婆さん一人で住める家じゃないだろう。もし間違っって火でも出したら、あの家全体が巨大な薪のようなもんだ。ボヤではすまされないぞ」と、下瞼に疲れを滲ませている。お金絡みや、薄情で言うような父ではない。

私は犬の小太郎の話をした。

「お父さんも、覚えているはずだっ」

眉根を寄せながら、箸を動かしていたが「あっ」と声をあげた。

「いたいた。小太郎っていう見習いの職人が。

俺に、しょっちゅう飴やキャラメルをくれたっけ」

「……雑種って言ってたわよ、薫さん」

店の名前が入った湯飲み茶碗の手を止めたまま、呆れてしまった。

「田舎から出て来て、まだ十六か十七くらいだったのかなあ。きっと俺をダシにして、年頃の薫さんの気を引きたかったんだらうな」

「だったらその人、可哀そうねえ。憧れのマドンナの頭のなかで、どうして犬にすり替わってしまったのかしら。それとも、わざと雑種だなんて言っているの？ しつこかったとか？」

「知らねえよ。だからあのヒト、昔から苦手なんだよ」

「歳に関係なく、昔からちょっと変わっているんだ。フフフ、困った伯母さんね」

父は、仏頂面をどんぶりで隠すようにして、蕎麦つゆを飲み干した。

松の内が明けてから、一ツ橋の家に私の荷物を運びこんだ。春樹兄さんが自分のワンボックスカーで、手伝ってくれた。

父は心配そうだったが、どこかホッとした様子だった。

一緒に暮らしてみると、私達は結構いいコンビだった。

薫さんの財布は、いつも小銭がいっぱいで、膨らんでいた。レジで素早く小銭を数えるのが、難しくなっているのだ。思い切ってそのことを指摘すると、今度は私の財布に小銭が増えた。夜な夜な炬燵の上で、互いの財布を広げて両替し合うのだ。

私がアルバイトに行っている間、薫さんはやけに張り切って掃除に精を出すようになった。やはり、人恋しかったのか、一緒にいると幸せそうで、私もその様子に心満たされた。

三寒四温を感じ始めた頃、父を夕食に招待した。父に、暮らしぶりを伝えるには、一番手っ取り早いからである。薫さんに可愛がられている姿を見せたい、という優越感も少しあった。

「レタスをちぎってもらっても、いいですか？」

料理はほぼ仕上がっていた。私は、鍋に入った鮭のシチューを焦がさないように、木べらで煮込んでいた。クレームブリュレのカaramelも、いい色に焦がすことができた。ドレッシングをかき混ぜ、レトロなガラス瓶に移し替える。私は、砂糖のストックも、すり鉢や、漂白剤の在処まで分かるようになっていた。

炬燵と台所を往復して、サラダと取り皿を運ぶと、八時を少し回っていた。父が、そろそろつく頃である。

炬燵で一息ついた。昔から、こうして暮らしているような気がしてくる。

「雪ちゃん、来月、一緒に花見に行きましょうよ」

「桜ですか？」

「ううん、水芭蕉の花。毎年、見に行く場所があるの。あなたにも見せたいわ」

「私、運転できますよ。父の車を借ります」

「弟が夕食を食べにくるなんて、ちょっと前までは考えられなかったわ。雪ちゃんのお陰ね。家も人間も古くなるばかりで、いっそのこと早くお迎えが来ないかなと、いつも思っていたのよ。一人でいると、昔の事しか考えないの。『善雄ちゃんが生まれた時は、お守りをよくさせられたなあ』とかね。おんぶ紐が肩や胸に食い込んで、痣ができたわ。善雄ちゃんは、一升餅みたいな大きな顔をのけぞらせて大泣きするもんだから、まだ小学生の私は大変だったの。引っ張られた髪が痛くて、こっちまで泣いちゃった」

思い出に心をとられた微笑は、悲し気だった。

野鳥の鋭い声が、私を現実に戻した。

気がつくとき薫さんが、木道のずっと先を歩いている。

後姿を、速足で追った。

鉈で切り落としたように、道は終わっていた。

石狩川が、視界を圧して広がっていた。

薫さんはしゃがんだまま言った。

「はい、これでお終い」

木道の先端は、流木や枝がザクザクと寄っていた。川の流力は速く、向こう岸まで二百メートルはある。私はいままで、大河の本流に向かって歩いていたのだった。

「雪ちゃん、私と一緒に古民家カフェをやりましょう」

薫さんは背筋を伸ばし、清々した顔で言った。

「価値のある造りを活かしたまま、一階を改装して、ノスタルジックなカフェにするのよ。いいでしょう？」

「でも、資金は？」

「私だって、少しは貯えを出せるわよ。後は、善雄ちゃんがいるじゃない。任せなさい。簡単よ」

私に断れるはずもない。心臓が高鳴る。

「分かりました。やりましょう。ただ、生意気を言うようですが、薫さんのお金を、使わせるわけにはいきません」

「やっぱり雪ちゃんは、優しいのね。安心して。母が遺した着物や貴金

属が、仕事部屋にしまっているんだから。どうせ、あの世に持っていけないのよ。売りましょう。だけど、母と私の交流があったことは、ここだけの話よ」

ヒデ子さんの話が出てくるなんて、どこまで真に受けたらいいのだろう。小首を傾げた薫さんは、水芭蕉のような涼しい顔で、象牙の簪を向けた。